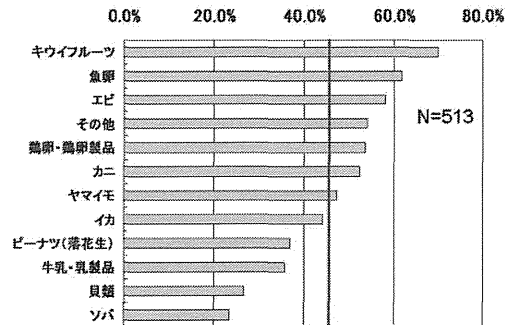


これを主要原因食物別に見ると、即時型（食物負荷試験陽性を含む）症状を根拠に判断されていたのはキ

図5 除去理由に即時型（食物負荷試験含む）誘発がある割合



ウイフルーツが最も多く 71.4%、以下魚卵（61.8%）、エビ（58.1%）、鶏卵・鶏卵製品（53.7%）、カニ（52.4%）、ヤマイモ（47.3%）であった。逆に即時型症状を根拠としている割合の少ないものは、ソバ（23.5%）、貝類（26.8%）であった（図5）。

1年以内の検査結果を根拠に判断されているものは、鶏卵・鶏卵製品が最も多く 33.3%を占めた。以下、ソバ（28.2%）、ピーナツ（27.4%）、牛乳・乳製品（21.4%）、カニ（19.0%）が多かった。

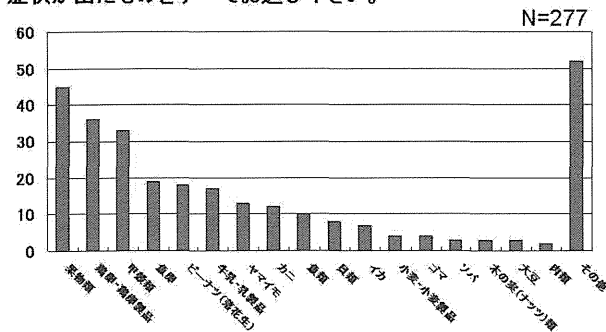
診断根拠として乏しい“その他”は、ソバ（43.5%）、ヤマイモ（41.8%）、貝類（53.6%）が多かった。

3. 原因食物を食べて2時間以内に明らかな症状があった回答に対して、過去1年以内に原因食物を食べて明らかな症状が出たものは何れですか。

5.1%（277/5407）に認められ、最も多かったものは鶏卵（36名）で、以下、エビ（21名）、キウイフルーツ（20名）、魚卵（19名）、ピーナツ（18名）、牛乳・乳製品（17名）、ヤマイモ（13名）、カニ（12名）、魚類（10名）であった（図6）。

図6 原因食物を食べて、2時間以内に明らかな症状があったと回答した方にお聞きします（食物負荷試験含む）。

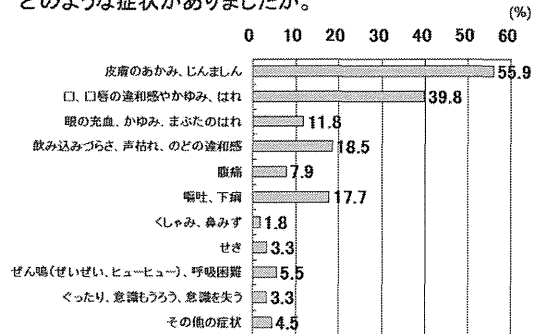
過去1年以内にあなたのお子さんが原因食物を食べて明らかな症状が出たものをすべてお選び下さい。



これら食品で誘発された症状は、皮膚症状が最も多く 55.9%、以下口、口唇の違和感やかゆみ、はれが 39.8%、飲み込みづらさ、声嘎れ、喉の違和感が 18.5%、嘔吐、下痢が 17.7%であった。また喘鳴、呼吸困難も

5.5%、ぐったり、意識朦朧、意識消失も 3.3%に見られた（図7）。

図7 食べてから2時間以内に具合が悪くなったとき、どのような症状がありましたか。



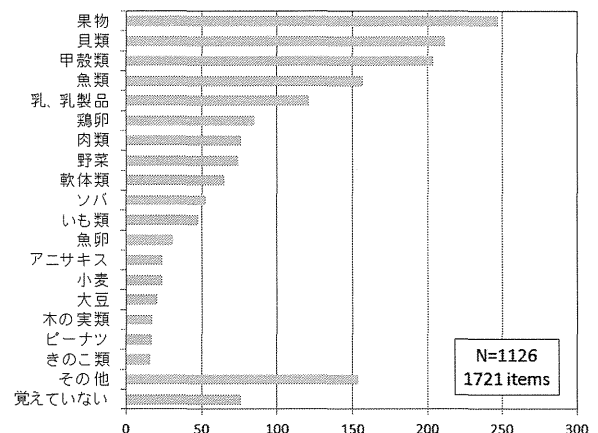
《成人》

回答者数は 4678 名、男性 2343 名、女性 2335 名（男女比 1.0）、平均 39.6±11.0 歳であった。このうち関東（1都6県）在住が 1727 名（36.9%）、北海道・東北が 539 名（11.5%）、中部が 778 名（16.6%）、近畿 885 名（18.9%）、中国・四国 355 名（7.6%）、九州地方が 394 名（8.4%）であった。有職者は 2492 名（53.3%）、パート・アルバイト、主婦（夫）、学生など、それ以外が 2186 名（46.7%）であった。

1. あなたは、これまで特定の食物を食べて具合が悪くなったことがありますか（食中毒を除きます）。

“はい”と回答したのは 1126 名（24.1%）であった。食品数は、“覚えていない”と回答した 76 名を除き、1645 品目であり、一人あたりの食物品目数は 1.6 品目となった。その原因食物の内訳（複数回答）は果物が最も多く 247 例で、全体の 15.0%を占めた。以下貝類 211 例（12.8%）、甲殻類 204 例（12.4%）、魚類 157 例（9.5%）、乳・乳製品 121 例（7.4%）と続き、上記 5 品目で全体の 57.1%を占めたが、小児と比較して原因食物は多岐にわたっていた（図1）。

図1. あなたは、これまで特定の食物を食べて具合が悪くなったことがありますか（食中毒を除きます）。



2. 現在、あなたがアレルギーのために食べないように

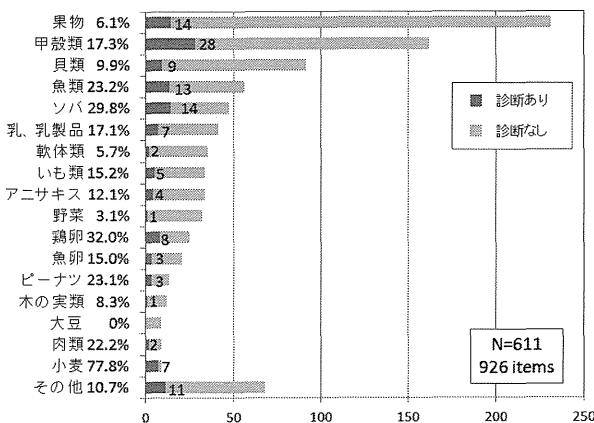
している食物をすべてお選びください（医師の診断・指示の有無は問いません）。

現在、食べないようにしている食物があるとする回答は611名（13.1%）、男女比は0.72、平均年齢39.1±11.0歳であった。食物品目数は926品目、一人あたりの品目数は1.5品目であった。その食物の内訳（複数回答）は、果物が231例（37.8%）、甲殻類162例（26.5%）、貝類91例（14.9%）、魚類56例（9.2%）、ソバ47例（7.7%）、牛乳、乳製品41例（6.7%）、軟体類35例（5.7%）、イモ類、アニサキスが各33例（5.4%）、野菜32例（5.2%）が上位10品目であった（図2）。

2-1 これらの食品を食べないようにしている理由をお選びください。

“自己判断”が726例（78.4%）と圧倒的に多く、次いで“医師の診断・指示”が132例（14.3%）で、この2つの理由で全体の92.7%を占めた。“医師の診断・指示”によって食べないようにしている食物があるものは88名（1.9%）で、アレルギーのために食べないようにしている食物がある回答者の14.4%であった。“医師の診断・指示”によって食べないようにしている食物は、甲殻類28例が最も多く、次いでソバ、果物が14例、魚類13例、貝類9例と続いた。除去理

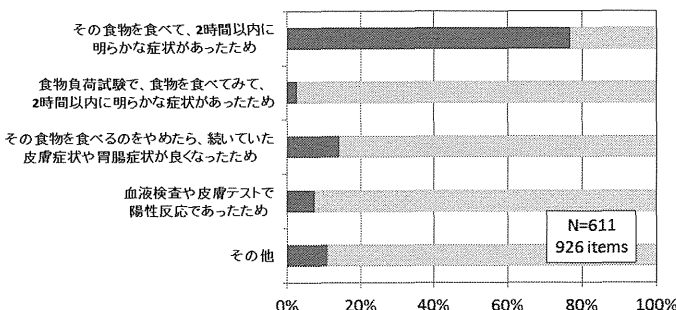
図2 現在、あなたがアレルギーのために食べないようにしている食物をすべてお選びください。（医師の診断ありの%）



由のうち、“医師の診断・指示”によるものが多かった食物は小麦77.8%（7/9）、鶏卵32.0%（8/25）、ソバ29.8%（14/47）であった。

2-2 これらの食物を食べないようにした方が良いと判断した理由は何ですか（複数回答）。

図3. 除去している食物を食べないようにした方が良いと判断した理由は何ですか。

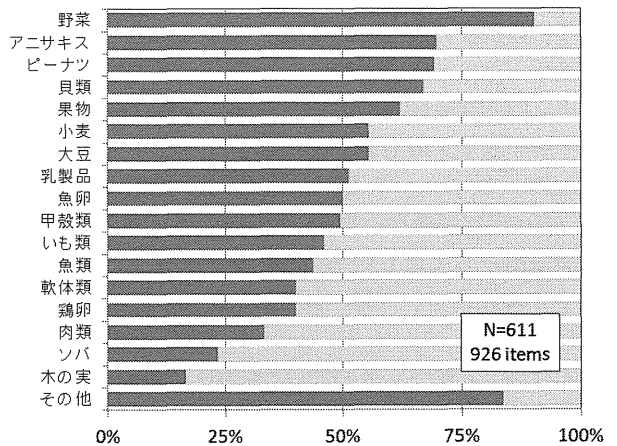


“即時型症状を認めた”が712例（76.9%）、“除去して改善した”が131例（14.1%）、“検査結果陽性”が69例（7.5%）、“負荷試験で即時症状を認めた”が26例（2.8%）、“その他”が100例（10.8%）であった（図3）。

2-3 これらの食物を食べないようにし始めた年齢をお答えください。

“10歳未満”が135例（14.6%）、“10代”が270例（29.2%）、“20代”が252例（27.2%）、“30代”が165例（17.8%）、“40代”が77例（8.3%）、“50代”は27例（2.9%）であった。食べないようにし始めた年齢が成人以降の割合が多かった食物は、野菜、アニサキス、ピーナツ、貝類、果物、小麦、大豆、乳製品、魚卵で、いずれも50%以上を占めた（図4）。

図4. 食べないようにしている食物を食べないようにし始めた年齢をお答えください(20歳代以降の割合)。



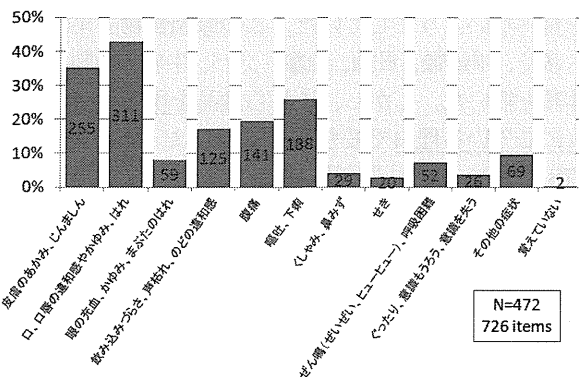
3. 特定の食物を食べて2時間以内に症状があった回答者への追加質問

食べてから2時間以内に症状を認めたのは472名（10.1%）、726品目で、一人あたりの品目数は1.5品目であった。エビ72例、カニ62例、キウイフルーツ56例、貝類52例、メロン40例、ソバ34例、魚類、ヤマイモ28例、モモ25例、牛乳・乳製品24例が上位10品目を占めた。

3-1 これらの食物を食べてから2時間以内に具合が悪くなったとき、どのような症状がありましたか。

食物によって誘発された症状（複数回答）は、“口、口唇の違和感やかゆみ、はれ”が最も多く311例（42.8%）、次いで“皮膚のあかみ、じんましん”が255例（35.1%）、“嘔吐、下痢”が188例（25.9%）、“腹痛”141例（19.4%）、“飲み込みづらさ、声枯れ、のどの違和感”が125例（17.2%）であった。“ぐったり、意識もうろう、意識を失う”といった症状は26例（3.4%）でみられた（図5）。

図5. これらの食物を食べてから2時間以内に具合が悪くなったとき、どのような症状がありましたか。



上位 10 品目で食物別に臓器症状をみると、エビ、カニでは皮膚および粘膜症状、魚類、ヤマイモでは皮膚症状、キウイフルーツ、メロン、モモでは粘膜症状、ソバ、貝類、牛乳・乳製品では消化器症状の回答が多く、それぞれ回答者の 50%以上を占めていた。

3-2 これらの食物を食べて、過去 1 年以内に明らかな症状が出たものをお答えください。

205 名 (4.4%) で 1 年以内に症状の既往を認めた。エビ 32 例が最も多く、続いてカニ 20 例、貝類 19 例、メロン 16 例、キウイフルーツ 15 例と続いた。また、1 年以内に食物負荷試験によって症状を確認したのは 10 名 (0.2%) 17 例で、ソバ 3 例、鶏卵・鶏卵製品、牛乳・乳製品、エビ、魚類、肉類がそれぞれ 2 例などであった。

4. 普段は食べても何も症状が出ない食物で、食べてからおおむね 2 時間くらいのうちに運動して具合が悪くなりやすかったり、強い症状がでたりする特定の食物がありますか。

“ある”と回答したのは 248 名 (5.3%)、食物品目数は 343 品目であった。原因食物は、牛乳・乳製品が 71 例と多く、次いで果物 44 例、甲殻類 29 例、貝類 23 例、魚類 21 例であった。このうち、医師による診断があったのは 26 名 (0.6%) 50 品目で、上位から牛乳・乳製品 8 例、小麦 6 例、エビ 5 例、カニ、鶏卵が各 4 例であった。しかし、回答は、前述のアレルギーのために避けている食物との重複回答も多くみられた。

4-1 これらの食物を食べてからおおむね 2 時間以内に運動した場合、どのような症状が出ますか。

誘発される症状は、“腹痛”が最も多く 132 例 (38.5%)、続いて“嘔吐、下痢”が 130 例 (37.9%)、“皮膚の赤み、じんましん”が 98 例 (28.6%)、“口、口唇の違和感やかゆみ、はれ”が 59 例 (17.2%)、“飲み込みづらさ、声枯れ、のどの違和感”が 41 例 (12.0%) であった。原因食物として最も多い牛乳・乳製品では、“腹痛”が 64.8%、“嘔吐、下痢”が 60.6%と、消化器症状の割合が高かった。“ぐったり、意識もうろう、意識を失う”は 25 例 (7.3%) で、原因食物は小麦、魚類がそれぞれ 4 例ずつで最も多かった。

D. E. 考察、結論

インターネット調査は、調査対象者がインターネットを使うことができ、調査会社に登録しているという特殊な集団であり、何らかの強いバイアスがかかる可能性がある。本調査においてもその可能性を否定できない。今回協力を得た (株) マクロミルはインターネット調査会社の中で国内最大手であり、会員数は 250 万人を超している。

《小児》

調査対象者を小学 3 年生としたのは、食物アレルギー患者の多くは乳児期に発症し、経年変化の中で 6 歳までに主要原因食物はおおよそ 90%が耐性を獲得していくことから、小学校 3 年生になれば、除去も固定化し、乳幼児期に多いにわか食物アレルギー患者を最小限に調査できることを期待したものである。

食物による不利益な反応の既往者 (食中毒を除く) は 18.4%であった。これは必ずしも食物アレルギーばかりでなく不耐症など雑多なものも包含された結果である。原因食品は鶏卵が最も多く、28.4%にも及んだ。鶏卵は不耐症症状を誘発しやすい食品ではないために、この多くが食物アレルギーの既往である可能性がある。それ以下も牛乳・乳製品、エビ、魚類、魚卵などが続き、どれも不耐症症状を誘発しやすい食品ではない。

次に現病歴を推測する設問 (現在、あなたのお子さんに食べさせないようにしている食物は?) では、12.4%が現在何らかの食品を食べないようにしていた。この原因食品も鶏卵を筆頭にソバ、ピーナッツ、牛乳・乳製品、魚卵、カニ、エビと、食物アレルギーの主要な原因食品が上位を連ねた。ただしこの除去の判断には医師の診断・指示の有無は問うていないので、その信憑性は決して高いわけではなく、12.4%は食物アレルギーの有症率として採用するには問題がある。

これら食品を現在食べさせないようにしている理由は、最も多いのは“自己判断” (51.7%) であり、“医師の診断・指示に基づく”ものは 411 名 (36.8%) に留まり、それに基づく有症率は 7.6% (411/5407) と算出される。“自己判断”を根拠とする場合は、本来除去する必要がない可能性があり、それにも関わらず食べさせないようにしていることは、学校における食物アレルギー対応に医師の診断・指導が必要であることを改めて示唆する結果である。食品別に、“自己判断”で除去されやすいものにヤマイモ、エビ、貝類が上がっていたが、これらは日常生活上での除去が他の食品に比べて容易であることに起因するものと思われる。

次に食べさせないようにしている根拠として、“即時型 (負荷試験を含む) の既往”、即ち根拠として信憑性の高いものは 513 名 (46.0%) で、これを基に考えた有症率は 9.5% (513/5407) となる。これは根拠の高い食物アレルギーの有症率の 1 つとして考えることが出来るだろう。一方で必ずしも根拠とされない“検査陽

性”が16.2%、“除去陽性”が10.2%にも及んだ。これら結果からも保護者の考える食物除去の定義の危うさがわかる。また食品別にもこの根拠の比率は異なり、キウイや魚卵、エビは症状をもとに除去される傾向にあり、逆にソバ、貝類はその割合が少なかった。また“検査結果”から除去されているものに、ソバ、ピーナッツ、カニ、診断根拠として乏しい“その他”の理由で除去されている割合が多いものに、ソバ、ヤマイモ、貝類が多かった。これら根拠が乏しく除去される傾向の高い食品は、一般的に食物アレルギー症状が出やすい食品や、アナフィラキシーリスクが高い食品と理解されていたりするものが多く、これらは念のために除去されている可能性が高い。ただしここで言う即時型症状の有無は医師の判断を必要としないので、症状を保護者が誤解して抽出している可能性も否定出来ず、また即時型既往の時期も問わないので、信憑性の高さは必ずしも高いわけではない可能性もある。

原因食物を食べて、2時間以内に明らかな症状があった回答（食物負荷試験含む）に対して、過去1年以内のものは277名であった。これから推察される有症率は5.1%（277/5407）となる。原因食物として最も多いのは他であるが、食物別には鶏卵、エビ、キウイフルーツ、魚卵、ピーナッツ、牛乳・乳製品が多かった。これら食品で誘発された症状は、皮膚症状が最も多かったが、飲み込みづらさ、声嘎れ、喉の違和感が18.5%、喘鳴、呼吸困難も5.5%、ぐったり、意識朦朧、意識消失も3.3%に見られた。引き続き食物アレルギーによるアナフィラキシー症状の重篤度がうかがわれる。

今回の調査における我が国の小学3年生の食物アレルギーの有症率はおよそ5.1%（除去食物に対して、過去1年間に即時型症状の既往がある割合）～7.6%（除去食物が医師の診断・指示に基づく割合）～9.5%（除去食物が時期を問わず即時型症状の既往がある割合）と推察された。これは諸外国の調査と比較しても相応である。

《成人》

調査対象は、年齢・性別の割り付けを行い、成人各年齢層の食物アレルギー有症率を調査することを目的とした。地域、職種などにおいても極端に偏重のない対象集団であると考えられる。

食物による不利益な反応の既往者（食中毒を除く）は24.1%であった。これは必ずしも食物アレルギーばかりでなく不耐症など雑多なものも含まれた結果である。また、過去に寛解した小児期の食物アレルギーの原因食物も含まれると考えられる。原因食物は果物が15.0%と最も多く、次いで貝類12.8%、甲殻類12.4%、魚類9.5%であった。小児期に多い牛乳・乳製品、鶏卵がこれ続き、小児と比較して上位4抗原は小児期以降で特徴的な食物であることが考えられた。

次に現病歴を推測する現在、食べないようにしてい

る食物の回答では、13.1%（611/4678）が何らかの食物を食べないようにしていた。この原因食物も果物が最も多く、甲殻類、貝類、魚類、ソバ、牛乳・乳製品、軟体類と続いた。しかし、これら食品を現在食べないようにしている理由で最も多かったのは“自己判断”の78.4%であった。“医師の診断・指示に基づく”ものは14.3%に留まり、全体の1.9%（88/4678）であった。“自己判断”を根拠とする場合は、本来除去する必要がない食物が含まれる可能性があり、万が一、それが一過性の症状などであっても、その後除去するかどうかの判断は個人によって異なる可能性が高い。このため、13.1%を食物アレルギーの有症率とする訳にはいかない。

次に食べないようにしている根拠として、“食べてから2時間以内の症状（負荷試験を含む）の既往”と回答したのは、10.1%（472/4678）であった。根拠として信憑性の高いこの判断に基づく数値は、実際的な食物アレルギーの有症率に近いことが考えられる。しかし、ここでの即時型症状の既往は、医師の判断を必要としないため、症状を誤解して抽出している可能性は否定出来ない。このほか、必ずしも根拠とならない“検査陽性”が7.5%、“除去して改善した”も14.1%に及んだ。このことは、今回の結果の中には“なるべくそのものを食べないようにしている”といったような食物が含まれている可能性があり、除去の程度についても一律でないことが推察される。

また即時型既往の時期を問わないため、必ずしも現状を反映しているとは言えない可能性がある。次に、原因食物を食べて、2時間以内に明らかな症状があった回答（食物負荷試験含む）に対して、過去1年以内のものは205名であった。これから推察される有症率は4.4%（205/4678）となる。しかし、診断後、やがて食べられるようになることが多い小児と比較し、成人では、一度除去の判断をした食物を定期的に年単位で経過をみている可能性は高くなく、過去1年以内に症状の既往があることが、必須の条件とは言い難い。1年以内の症状誘発の原因食物としては、多いものからエビ、カニ、貝類、メロン、キウイフルーツであり、前述の“即時型症状の既往”に基づいて食べないようにしているものとも類似した結果であった。このことは、“即時型症状の既往”をもとにした有症率にもある程度の信憑性をもたらす結果と考えられる。

2時間以内に誘発された明らかな症状では、“口、口唇の違和感やかゆみ、腫れ”の粘膜症状が最も多く、次いで“皮膚の赤み、じんましん”の皮膚症状、“嘔吐、下痢”や“腹痛”の消化器症状が続いた。“ぜん鳴、呼吸困難”や“せき”などの呼吸症状は比較的少なく、重症度の高い症状の頻度が低いことが、医療機関の受診がない原因の一つと考えられた。また、成人では小児と比較して給食などで一律に皆が同じものを食べる機会が減り、その食習慣の中で除去が比較的容易なも

のは特に自己判断で除去されやすい。原因食物としてもっとも多かった果物では、除去が比較的容易であることと、口腔の粘膜症状が多く、大多数は症状が重篤化しにくい口腔アレルギー症候群 (OAS) と考えられた。反対に、小麦や鶏卵、ソバなどでは、日常的に摂取する頻度が低く、軽微ではない症状が出やすいため、医療機関で診断がつけられている割合が高いと推察される。このため、比較的除去が容易で、重篤な症状を伴わない食物アレルギーをどこまで正確に抽出できるかが、有症率を導き出すための検討課題であるといえる。

普段は食べても何も症状が出ない食物で、食べてからおおむね2時間くらいのうちに運動して具合が悪くなる食物があると回答したのは、5.3%であった。医師の診断があったのは0.6%のみで、誘発される症状は、アレルギーのために食べないようにしている食物による症状とは異なり、“腹痛”、“嘔吐、下痢”が多数を占めた。特に原因食物としてもっとも多かった乳製品では、その症状の60%以上を消化器症状が占めていた。これまでに、牛乳・乳製品によるFDEIA症例の報告は少なく、これらのことから、回答の多くは、乳糖不耐症などの症状の増悪などである可能性が考えられた。また、他の原因食物の回答の中にも、アレルギーのために食べないようにしている食物との重複回答が多くみられ、設問の意図と異なり、もともとの症状が運動によって増悪するケースが含まれている可能性があった。このため、5.3%は実際のFDEIAの有症率としては適切とは言えず、医師の診断がある0.6%以外の有症率に関して、今回の調査で明らかにすることは難しいと考えられる。

自己申告による有症率調査では、特に不耐症などの可能性が高い食物で、不利益な症状と食物アレルギー症状の区別がつけられにくいことを考慮すべきである。今回の調査では、冒頭の設問でも食物による不利益な症状について食中毒を除くことを注釈しているが、結果では、一般的に食中毒などの原因となりやすい貝類で、不利益な症状の既往がアレルギーのために除去している食物と乖離して多くみられた。このことから、食物による不利益な症状が、何に起因するかを、適切に判断することには困難が伴うと推察される。小児と異なり、成人の場合では、多くが自己判断で食物を避けているため、症状についての認識の違いが、有症率に大きな影響を与える可能性がある。また、重篤な症状が誘発される場合と、軽微な症状が誘発される場合でも、その認識には差が出るのが推測され、有症率を検討する上で、その症状の重篤度や臨床型も考慮する必要があることが示唆された。

今回の調査における我が国の成人の食物アレルギー有症率は、およそ1.9% (医師の診断による割合) ~ 10.1% (即時型症状を呈する割合) であると推察された。その重篤度や臨床型は様々であると考えられるが、

諸外国のインターネット調査と比較しても相応であった。

小児も成人も食物アレルギーのインターネットによる有症率調査は調査対象等のバイアスにより近似的な有症率さえも求めることも出来なかった。インターネット調査により有症率を求めることは困難であるが、他の活用には期待が持てる点もある。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Ebisawa M, Shibata R, Sato S, Borres MP, Ito K. : Clinical Utility of IgE Antibodies to ω -5 Gliadin in the Diagnosis of Wheat Allergy: A Pediatric Multicenter Challenge Study, *Int Arch Allergy Immunol.* 2012 ; 158(1) : 71-6
2. Burks AW, Tang M, Sicherer S, Muraro A, Eigenmann PA, Ebisawa M, Fiocchi A, Chiang W, Beyer K, Wood R, Hourihane J, Jones SM, Lack G, Sampson HA : ICON: Food allergy, *The Journal of Allergy and Clinical Immunology.* 2012 ; 129(4) : 906-20
3. Ebisawa M, Moverare R, Sato S, Maruyama N, Borres MP, Komata T : Measurement of Ara h 1-, 2-, and 3-specific IgE antibodies is useful in diagnosis of peanut allergy in Japanese children, *Pediatric Allergy and Immunology.* 2012 ; 23(6) : 573-81
4. Simons FE, Arduzzo LR, Bilò MB, Dimov V, Ebisawa M, El-Gamal YM, Ledford DK, Lockey RF, Ring J, Sanchez-Borges M, Senna GE, Sheikh A, Thong BY, Worm M : 2012 Update: World Allergy Organization Guidelines for the assessment and management of anaphylaxis., *Current opinion in allergy and clinical immunology.* 2012 ; 12(4) : 389-99
5. Nakano T, Shimojo N, Okamoto Y, Ebisawa M, Kurihara K, Hoshioka A, Yamaguchi K, Ito K, Fujisawa T, Kameda M, Suehiro Y, Ogura H, Shibata R, Suzuki S, Takahashi Y, Ikeda M, Kohno Y : The Use of Complementary and Alternative Medicine by Pediatric Food-Allergic Patients in Japan., *International archives of allergy and immunology.* 2012 ; 159(4) : 410-5
6. Ebisawa M, Sato S, Utsunomiya T, Hayashi N, Imai T, Yanagida T : Rush oral immunotherapy for the treatment of hen's egg- and cow's milk-induced anaphylaxis, *Translational Science-from Basic to Clinical Immunology and Allergy.* 2012 : 359-64
7. Ito Y, Moritsugu N, Matsue T, Mitsukoshi K, Ayame H, Okochi N, Hattori H, Tashiro H, Sato S, Ebisawa M : An automated multiplex specific IgE assay system using a photoimmobilized microarray, *Journal of biotechnology.* 2012 ; 161(4) : 414-21
8. 小俣貴嗣, 海老澤元宏 : 抗原特異的IgE抗体測定による食物アレルギーの診断の進歩 (プロバビリティーカーブ, アレルギーコンポーネントの活用), *アレルギー.* 2012 61(5) : 599-606
9. 海老澤元宏, 杉崎千鶴子, 林典子, 佐藤さくら, 今井孝成 : わが国における経口免疫 (減感作) 療法の実態, *日本小児アレルギー学会誌.* 2012 ; 26(1) : 158-66
10. Ebisawa M, Shibata R, Sato S, Borres MP, Ito K : Clinical Utility of IgE Antibodies to ω -5 Gliadin in the Diagnosis of Wheat Allergy: A Pediatric

- Multicenter Challenge Study, *Int Arch Allergy Immunol.* 2012;158:71-76 .
11. Ebisawa M: Chapter 9 Food-induced Anaphylaxis and Food Associated Exercise-induced Anaphylaxis: Food Allergy: Expert Consult Basic (editorial supervisor: Drs. John M. James, Wesley Burks, and Philippe Eigenmann) , 2011 ; 113-127. Elsevier
 12. Borres MP, Ebisawa M, Eigenmann PA: Use of allergen components begins a new era in pediatric allergology, *Pediatr Allergy Immunol.* 2011 Aug;22 (5) :454-61.
 13. Sato S, Tachimoto H, Shukuya A, Ogata M, Komata T, Imai T, Tomikawa M, Ebisawa M: Utility of the peripheral blood basophil histamine release test in the diagnosis of hen's egg, cow's milk, and wheat allergy in children, *Int Arch Allergy Immunol.* 2011;155 Suppl 1:96-103.
 14. Urisu A, Ebisawa M, Mukoyama T, Morikawa A, Kondo N: Japanese Society of Allergology: Japanese guideline for food allergy, *Allergol Int.* 2011 Mar;60 (2) :221-36.
 15. Ito K, Sjölander S, Sato S, Movérare R, Tanaka A, Söderström L, Borres M, Poorafshar M, Ebisawa M: IgE to Gly m 5 and Gly m 6 is associated with severe allergic reactions to soybean in Japanese children, *J Allergy Clin Immunol.* 2011 Sep;128 (3) :673-5.
 16. Sackesen C, Assa'ad A, Baena-Cagnani C, Ebisawa M, Fiocchi A, Heine RG, Von Berg A, Kalayci O: Cow's milk allergy as a global challenge, *Curr Opin Allergy Clin Immunol.* 2011 Jun;11 (3) :243-8.
 17. Akiyama H, Imai T, Ebisawa M: Japan food allergen labeling regulation-history and evaluation, *Adv Food Nutr Res.* 2011;62:139-71.
 18. Sato S, Tachimoto H, Shukuya A, Kurosaka N, Yanagida N, Utsunomiya T, Iguchi M, Komata T, Imai T, Tomikawa M, Ebisawa M : Basophil Activation Marker CD203c Is Useful in the Diagnosis of Hen's Egg and Cow's Milk Allergies in Children , *International Archives of Allergy and Immunology.* 152(1) ; 54-61. 2010
 19. Sato Y, Akiyama H, Matsuoka H, Sakata K, Nakamura R, Ishikawa S, Inakuma T, Totsuka M, Sugita-Konishi Y, Ebisawa M, Teshima R. : Dietary carotenoids inhibit oral sensitization and the development of food allergy., *J Agric Food Chem.* 58(12) ; 7180-6. 2010
 20. Fiocchi A (Chair), Brozek J, Schünemann HJ (Chair), Bahna SL, Berg A, Beyer K, Bozzola M, Bradsher J, Compalati E, Ebisawa M, Guzman MA, Li H, Heine RG, Keith P, Lack G, Landi M, Martelli A, Rancé F, Sampson H, Stein A, Terracciano L and Vieths S : World Allergy Organization (WAO) Diagnosis and Rationale for Action against Cow's Milk Allergy (DRACMA) Guidelines, *Pediatr Allergy Immunol.* 21 (Suppl. 21) ; 1-125. 2010
 21. Fiocchi A, Schünemann HJ, Brozek J, Restani P, Beyer K, Troncone R, Martelli A, Terracciano L, Bahna SL, Rancé F, Ebisawa M, Heine RG, Assa'ad A, Sampson H, Verduci E, Bouygue GR, Baena-Cagnani C, Canonica W, Lockey RF. : Diagnosis and Rationale for Action against Cow's Milk Allergy (DRACMA): A summary report., *J Allergy Clin Immunol.* 126(6) ; 1119-1128.e12. 2010
 22. 緒方美香, 宿谷明紀, 杉崎千鶴子, 池松かおり, 今井孝成, 田知本寛, 海老澤元宏 : 乳児アトピー性皮膚炎における Bifurcated needle を用いた皮膚プリクテストの食物アレルギーの診断における有用性(第2報) -牛乳アレルギー-, *アレルギー.* 59 (7) ; 839-846. 2010
2. 学会発表
 1. Ebisawa M : OIT worldwide: Oral Immuno-therapy in Japan, *Eradication of Food Allergy: Fantasy or Reality?*. Tel Aviv, Israel. 2012.1
 2. Ebisawa M : Oral Immunotherapy in Japan, University of South Florida. Tampa, Florida, USA. 2012.2
 3. Ebisawa M : Oral Immunotherapy in Japan, The Johns Hopkins Asthma and Allergy Center. Baltimore, USA. 2012.3
 4. Ebisawa M : 25th Anniversary Congress of The Korean Academy of Pediatric Allergy and Respiratory Disease: New Horizon in Food Allergy/Japan Food Allergen Labeling Regulation History and Evaluation, The 8th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Seoul, Korea. 2012.5
 5. Ebisawa M : 25th Anniversary Congress of The Korean Academy of Pediatric Allergy and Respiratory Disease: New Horizon in Food Allergy/Advances in Management of Food Allergy, The 8th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Seoul, Korea. 2012.5
 6. Ebisawa M : Therapeutic approaches of wheat anaphylaxis, European Academy of Allergy and Clinical Immunology Congress 2012. Geneva, Switzerland. 2012.6
 7. Ebisawa M : Food Challenge when and how to do it, 6th International Summit on Allergic Diseases. Beijing, China. 2012.9
 8. Ebisawa M : Countermeasures against An-aphylaxis, Joint Congress of APAPARI 2012 & 16th TAPAAI & 34th TCSI. Taipei, Taiwan. 2012.10
 9. Ebisawa M : Recent Advances in Management of Food Allergy, Joint Congress of APAPARI 2012 & 16th TAPAAI & 34th TCSI. Taipei, Taiwan. 2012.10
 10. Ebisawa M : Component Resolved Diagnostic(CRD), 2012 WAO International Scientific Conference. Hyderabad, India. 2012.12
 11. Ebisawa M : Practical Management of Food Allergy, 2012 WAO International Scientific Conference. Hyderabad, India. 2012.12
 12. Ebisawa M : Component Analysis for Diagnosis, 2012 WAO International Scientific Conference. Hyderabad, India. 2012.12
 13. Ebisawa M : Prevention of Food Allergy: Is it Feasible?, 2012 WAO International Scientific Conference. Hyderabad, India. 2012.12
 13. T. Utsunomiya, T. Imai, N. Yanagida, S. Sato, T. Komata, M. Tomikawa, A. Shukuya, M. Ebisawa: Effect Of Oral Anti-histamines On The Thresholds Of Hen'S Egg- And Cow's Milk-induced Anaphylactic Patients, 2011 AAAAI Annual Meeting. San Francisco, USA. 2011/3/20
 14. Ebisawa, M; Sato, S; Utsunomiya, T; Imai, T; Mita, H; Kajiwara, K; Taniguchi, M; Akiyama, ; Higashi, N: Urinary leukotriene E4 levels and effect of leukotriene modifier during rush oral immunotherapy for food-induced anaphylaxis, the XXX Congress of the European Academy

- of Allergy and Clinical Immunology. Istanbul, Turkey. 2011/6/11-15
15. Hayashi, N; Yanagida, N1; Goto, M; Imai, T; Utsunomiya, T; Sato, S; Ogata, M2; Ebisawa, M: Improvement of quality of life of food-induced anaphylactic children after rush oral immunotherapy, the XXX Congress of the European Academy of Allergy and Clinical Immunology. Istanbul, Turkey. 2011/6/11-15
 16. Goto, M; Sato, S; Imai, T; Yanagida, N1; Iikura, K; Utsunomiya, T; Komata, T; Tomikawa, M; Shukuya, A; Ebisawa, M: One year follow up after rush oral immunotherapy in cow's milk-induced anaphylaxis, the XXX Congress of the European Academy of Allergy and Clinical Immunology. Istanbul, Turkey. 2011/6/11-15
 17. Iikura, K; Sato, S; Yanagida, N1; Utsunomiya, T; Goto, M; Sugizaki, C; Hayashi, N; Imai, T; Ebisawa, M: One year follow up after rush oral immunotherapy in hen's egg-induced anaphylactic children, the XXX Congress of the European Academy of Allergy and Clinical Immunology. Istanbul, Turkey. 2011/6/11-15
 18. Sato, S; Yanagida, Imai, T; Iikura, K; Goto, M; Utsunomiya, T; Shukuya, A; Ebisawa, M: Underlying mechanisms of oral immunotherapy against hen's egg and cow's milk anaphylaxis, the XXX Congress of the European Academy of Allergy and Clinical Immunology. Istanbul, Turkey. 2011/6/11-15
 19. Katsuhito Iikura, Takanori Imai, Motohiro Ebisawa: Correlation between levels of TARC and number of food antigen sensitization in infantile atopic dermatitis, The 16th Asia Pacific Association of Pediatric allergy, Respiriology and Immunology. Fukuoka, Japan. 2011/10/28
 20. Tomohiro Utsunomiya, Takanori Imai, Kiyotake Ogura, Makiko Goto, Katsuhito Iikura, Sakura Sato, Takatsugu Komata, Morimitsu Tomikawa, Akinori Shukuya, Motohiro Ebisawa: Efficacy of oral immunotherapy for anaphylactic type of wheat allergy in Japanese children, The 16th Asia Pacific Association of Pediatric allergy, Respiriology and Immunology. Fukuoka, Japan. 2011/10/28
 21. Makiko Goto, Sakura Sato, Takanori Imai, Tomohiro Utsunomiya, Takatsugu Komata, Morimitsu Tomikawa, Akinori Shukuya, Motohiro Ebisawa: Rush oral immunotherapy (ROIT) for anaphylactic type of peanut allergy in Japanese children, The 16th Asia Pacific Association of Pediatric allergy, Respiriology and Immunology. Fukuoka, Japan. 2011/10/28
 22. Takanori Imai, Chizuko Sugizaki, Motohiro Ebisawa: Food Allergy in Japan, The 16th Asia Pacific Association of Pediatric allergy, Respiriology and Immunology. Fukuoka, Japan. 2011/10/29
 23. Takanori Imai, Chizuko Sugizaki, Motohiro Ebisawa: Ten Years Follow up of Japanese Survey on Immediate Type Food Allergy, XXII World Allergy Congress. Cancun, Mexico. 2011/12/5
 24. Takatsugu Komata, Miho Hasegawa, Kiyotake Ogura, Katsuhito Iikura, Makiko Goto, Tomohiro Utsunomiya, Sakura Sato, Takanori Imai, Morimitsu Tomikawa, Akinori Shukuya, Motohiro Ebisawa: Cross Sectional Study of 1822 Pediatric Food Allergy Patients, XXII World Allergy Congress. Cancun, Mexico. 2011/12/5
 25. Miho Hasegawa, Takatsugu Komata, Takanori Imai, Kiyotake Ogura, Makiko goto, Katsuhito Iikura, Tomohiro Utsunomiya, Sakura Sato, Morimitsu Tomikawa, Akinori Shukuya, Motohiro Ebisawa: Natural History of Food Allergy in Childhood -3 Years' Follow up of Pediatric Food Allergy Patients, XXII World Allergy Congress. Cancun, Mexico. 2011/12/6
 26. Motohiro Ebisawa: Allergen Component and Cross Reactivity, XXII World Allergy Congress. Cancun, Mexico. 2011/12/8
 27. M. Ebisawa, C. Sugizaki: Prevalence Of Allergic Diseases During First 7 Years Of Life In Japan, 2010 AAAAI Annual Meeting. 2010.2.26-3.2. New Orleans, LA
 28. N. Yanagida, T. Utsunomiya, S. Sato, M. Iguchi, T. Komata, T. Imai, M. Tomikawa, M. Ebisawa: Treatment of Hen's Egg- and Cow's Milk-induced Anaphylaxis by Rash Oral Immunotherapy, 2010 AAAAI Annual Meeting. 2010.2.26-3.2. New Orleans, LA
 29. S. Sjolander, F. Bernhardtsson, P. Brostedt, M. Borres, A. Tanaka, K. Ito, M. Ebisawa, S. Utsumi, M. Poorafshar: High IgE Reactivity to Subunit G5 from the Soybean Legumin Allergen Gly m 6 in Sera from Soy Allergic Japanese Children, 2010 AAAAI Annual Meeting. 2010.2.26-3.2. New Orleans, LA
 30. K. Ito, M. Ebisawa, S. Sato, S. Sjolander, M. Borres: Specific IgE to Gly m 5 and Gly m 6 in Children with Soybean Allergy in Japan, 2010 AAAAI Annual Meeting. 2010.2.26-3.2. New Orleans, LA
 31. Ebisawa M, Yanagida N, Sato S, Imai T: Rush oral immunotherapy for the treatment of hen's egg- and cow's milk-induced anaphylaxis, 28th Symposium Collegium Internationale Allergologicum. 2010.4.29. Ischia, Italy
 32. Ebisawa M: Patterns of allergy in Japan, Symposium on Frontiers in Food Allergen Risk Assessment. 2010.10.20-22. Nice, France
 33. Motohiro Ebisawa : FOOD CHALLENGES -GETTING IT RIGHT, APCAACI 2010. 2010.11.7. Singapore
 34. Motohiro Ebisawa : Food allergy; Diagnosis and treatment, WAO International Scientific Conference 2010. 2010.12.5. Dubai, UAE
 35. Motohiro Ebisawa : Diagnosis of Food Allergy; Probability curves, CRD, and Food provocation tests, 第60回日本アレルギー学会秋季学術大会. 2010.11.25. 東京
- H. 知的財産権の出願・登録状況
なし

Ⅲ. 研究成果の刊行物に関する 一覧表

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
Ebisawa M	Chapter 9 Food-induced Anaphylaxis and Food Associated Exercise-induced Anaphylaxis	editorial supervisor: Drs. John M. James, Wesley Burks, and Philippe Eigenmann	Food Allergy: Expert Consult Basic	Elsevier		2011	113-127
小田嶋 博	思春期喘息		アレルギー・リウマチ膠 原病診療最新ガイドラ イン	総合医学 社	東京	2012年 4月11 日	P43-45
秀 道広	抗ヒスタミン薬・抗ア レルギー薬	矢崎義男	治療薬 Up-To-Date 2013	メディカル ビュー社	大阪	2013	588-592

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Satoshi Konno ¹ , Nobuyuki Hizawa ² , Yuma Fukutomi ^{3,4} , <u>Masami Taniguchi</u> ³ , Yukio Kawagishi ⁵ , Chiharu Okada ^{6,7} , Yasushi Tanimoto ⁸ , Kiyoshi Takahashi ⁶ , Akira Akasawa ⁹ , Kazuo Akiyama ³ , Masaharu Nishimura ¹ :	The prevalence of rhinitis and its association with smoking and obesity in a nationwide survey of Japanese adults	Allergy	67	653-660	2012
Okabe Y, Adachi Y, Itazawa T, Yoshida K, Ohya Y, Odajima H, Akasawa A, Miyawaki T.	Association between obesity and asthma in Japanese preschool children.	Pediatr Allergy Immunol	23	550-555	2012
K. Yoshida, Y. Adachi, M. Akashi, T. Itazawa, Y. Murakami, H. Odajima, Y. Ohya and A. Akasawa	Cedar and cypress pollen counts are associated with the prevalence of allergic diseases in Japanese schoolchildren	Allergy	68	757-763	2013
Fukutomi Y, Taniguchi M, Nakamura H, Konno S, Nishimura M, Kawagishi Y, Okada C, Tanimoto Y, Takahashi K, Akasawa A, Akiyama K.	Association between body mass index and asthma among Japanese adults: risk within the normal weight range.	Int Arch Allergy Immunol.	157(3)	281-7	2012

Osamu Higuchi ¹ , Yuichi Adachi ¹ , Toshiko Itazawa ¹ , Yasunori Ito ¹ , Koichi Yoshida ² , Yukihiro Ohya ³ , Hiroshi Odajima ⁴ , Akira Akasawa ² , Toshio Miyawaki	Relationship between rhinitis and nocturnal cough in school children	Pediatr Allergy Immunol	23	562-566	2012
Fukutomi Y* , Taniguchi M, Tsuburai T, Tanimoto H, Oshikata C, Ono E, Sekiya K, Higashi N, Mori A, Hasegawa M, Nakamura H and Akiyama K	Obesity and aspirin intolerance are risk factors for difficult-to-treat asthma in Japanese non-atopic women.	Clinical & Experimenta l Allergy:	42	738-746	2012
Fukutomi Y* , <u>Taniguchi M</u> , Watanabe J, Nakamura H, Komase Y, Ohta K, Akasawa A, Nakagawa T, Miyamoto T, Akiyama K	Time Trend in the Prevalence of Adult Asthma in Japan: Findings from Population-Based Surveys in Fujieda City in 1985, 1999, and 2006.	Allergol Int.	60(4)	443-8	2011.
Okabe Y, Itazawa T, Adachi Y, Yoshida K, Ohya Y, Odajima H, Akasawa A, Miyawaki T.	Association of overweight with asthma symptoms in Japanese school children.	Pediatr Int	53	192-198	2011
Futamamura M, Ohya Y, Akashi M, Adachi Y, Odajima H, Akiyama K, Akasawa A.	Age-related prevalence of allergic diseases in Tokyo schoolchildren.	Allergol Int	60	509-515	2011
Osamu Higuchi, M.D., ¹ Yuichi Adachi, M.D., ¹ Toshiko Itazawa, M.D., ¹ Yasunori Ito, M.D., ¹ Koichi Yoshida, M.D., ² Yukihiro Ohya, M.D., ³ Hiroshi Odajima, M.D., ⁴ Akira Akasawa, M.D., ² and Toshio Miyawaki, M.D. ¹	Rhinitis has an association with asthma in school children	Am J Rhinol Allergy	27	E22-e25	2013

Yasunori Ito ^a Yuichi Adachi ^a Koichi Yoshida ^b Akira Akasawa	No Association between Serum Vitamin D Status and the Prevalence of Allergic Diseases in Japanese Children	Int Arch Allergy Immunol	160	218-220	2013
Ohta K, Bousquet PJ, Aizawa H, Akiyama K, Adachi M, Ichinose M, Ebisawa M, Tamura G, Nagai A, Nishima S, Fukuda T, Morikawa A, Okamoto Y, Kohno Y, Saito H, Takenaka H, Grouse L, Bousquet J	Prevalence and impact of rhinitis in asthma. SACRA, a cross-sectional nation-wide study in Japan.	Allergy	66(10)	1287-1295	2011
大矢幸弘	アトピー性皮膚炎 Q&A 食物アレルギーが関与する割合はどのくらいですか	小児科診療	74 巻	112-114	2011
下条直樹 河野陽一	アトピー性皮膚炎の疫学	日本医師会雑誌	140	960-962	2011
下条直樹	アトピー性皮膚炎—発症予防と重症化阻止は可能か—	アレルギー	60	956-964	2011
Borres MP, Ebisawa M, Eigenmann PA.	Use of allergen components begins a new era in pediatric allergology	Pediatr Allergy Immunol.	22	454-61	2011
Sato S, Tachimoto H, Shukuya A, Ogata M, Komata T, Imai T, Tomikawa M, Ebisawa M	Utility of the peripheral blood basophil histamine release test in the diagnosis of hen's egg, cow's milk, and wheat allergy in children	Int Arch Allergy Immunol.	155 Suppl 1	96-103	2011
Urisu A, Ebisawa M, Mukoyama T, Morikawa A, Kondo N	Japanese guideline for food allergy	Allergol Int.	60	221-36	2011
Ito K, Sjölander S, Sato S, Moverare R, Tanaka A, Söderström L, Borres M, Poorafshar M, Ebisawa M	IgE to Gly m 5 and Gly m 6 is associated with severe allergic reactions to soybean in Japanese children	J Allergy Clin Immunol.	128	673-5	2011
Akiyama H, Imai T, Ebisawa M	Japan food allergen labeling regulation—history and evaluation	Adv Food Nutr Res.	62	139-71	2011
Ebisawa M, Shibata R, Sato S, Borres MP, Ito K	Clinical Utility of IgE Antibodies to ω -5 Gliadin in the Diagnosis of Wheat Allergy: A Pediatric Multicenter Challenge Study	Int Arch Allergy Immunol	158(1)	71-6	2012
Burks AW, Tang M, Sicherer S, Muraro A, Eigenmann PA, Ebisawa M, Fiocchi A, Chiang W, Beyer K, Wood R, Hourihane J, Jones SM, Lack G, Sampson HA	ICON: Food allergy	The Journal of Allergy and Clinical Immunology	129(4)	906-20	2012
Ebisawa M, Moverare R, Sato S, Maruyama N, Borres MP, Komata T	Measurement of Ara h 1-, 2-, and 3-specific IgE antibodies is useful in diagnosis of peanut allergy in Japanese children	Pediatric Allergy and Immunology	23(6)	573-81	2012

Simons FE, Arduoso LR, Bilò MB, Dimov V, Ebisawa M, El-Gamal YM, Ledford DK, Lockey RF, Ring J, Sanchez-Borges M, Senna GE, Sheikh A, Thong BY, Worm M	2012 Update: World Allergy Organization Guidelines for the assessment and management of anaphylaxis	Current opinion in allergy and clinical immunology	12(4)	389-99	2012
Nakano T, Shimojo N, Okamoto Y, Ebisawa M, Kurihara K, Hoshioka A, Yamaguchi K, Ito K, Fujisawa T, Kameda M, Suehiro Y, Ogura H, Shibata R, Suzuki S, Takahashi Y, Ikeda M, Kohno Y	The Use of Complementary and Alternative Medicine by Pediatric Food-Allergic Patients in Japan	International archives of allergy and immunology	159(4)	410-5	2012
Ebisawa M, Sato S, Utsunomiya T, Hayashi N, Imai T, Yanagida T	Rush oral immunotherapy for the treatment of hen's egg- and cow's milk-induced anaphylaxis	Translational Science: from Basic to Clinical Immunology and Allergy		359-64	2012
Ito Y, Moritsugu N, Matsue T, Mitsukoshi K, Ayame H, Okochi N, Hattori H, Tashiro H, Sato S, Ebisawa M	An automated multiplex specific IgE assay system using a photoimmobilized microarray	Journal of biotechnology	161(4)	414-21	2012
小俣貴嗣, 海老澤元宏	抗原特異的 IgE 抗体測定による食物アレルギーの診断の進歩(プロバビリティーカーブ、アレルギーコンポーネントの活用)	アレルギー	61(5)	599-606	2012
海老澤元宏, 杉崎千鶴子, 林典子, 佐藤さくら, 今井孝成	わが国における経口免疫(減感作)療法の実態	日本小児アレルギー学会誌	26(1)	158-66	2012
Fukutomi Y, Taniguchi M, Nakamura H, Konno S, Nishimura M, Kawagishi Y, Okada C, Tanimoto Y, Takahashi K, Akasawa A, Akiyama K.	Association between body mass index and asthma among Japanese adults: risk within the normal weight range.	Int Arch Allergy Immunol.	157(3)	281-7	2012
秀道広	I型アレルギーからみる蕁麻疹・アトピー性皮膚炎の病態と治療	マルホ皮膚科セミナー	215	32-36	2012
Shindo H, Ishii K, Yanase Y, Suzuki H, Hide M.	Histamine release-neutralization assay for sera of patients with atopic dermatitis and/or cholinergic urticaria is useful to screen type I hypersensitivity against sweat antigens.	Arch Dermatol Res	304	647-654	2012
Takeuchi S, Saeki H, Tokunaga S, Sugaya M, Ohmatsu H, Tsunemi Y, Torii H, Nakamura	A randomized, open-label, multicenter trial of topical tacrolimus for the treatment of pruritus in patients with atopic dermatitis.	Ann Dermatol	2	144-150	2012

K, Kawakami T, Soma Y, Gyotoku E, Hide M, Sasaki R, Ohya Y, Kido M, Furue M.					
Yanase Y, Hiragun T, Yanase T, Kawaguchi T, Ishii K, Hide M	Application of SPR imaging sensor for detection of individual living cell reactions and clinical diagnosis of type I allergy	Allergol Int	62	163-169	2013

IV. 研究成果の刊行物・別刷

The prevalence of rhinitis and its association with smoking and obesity in a nationwide survey of Japanese adults

S. Konno¹, N. Hizawa², Y. Fukutomi^{3,4}, M. Taniguchi³, Y. Kawagishi⁵, C. Okada^{6,7}, Y. Tanimoto⁸, K. Takahashi⁶, A. Akasawa⁹, K. Akiyama³ & M. Nishimura¹

¹First Department of Medicine, School of Medicine, Hokkaido University, Hokkaido, Japan; ²Department of Pulmonary Medicine, Institute of Clinical Medicine, University of Tsukuba, Tsukuba, Japan; ³Clinical Research Center for Allergy and Rheumatology, Sagami National Hospital, Kanagawa, Japan; ⁴Department of Environmental and Preventive Medicine, Graduate School of Medical Science, Kanazawa University, Ishikawa, Japan; ⁵Department of Internal Medicine, Kurobe City Hospital, Toyama, Japan; ⁶National Hospital Organization, Minami-Okayama Medical Center, Okayama, Japan; ⁷National Hospital Organization, Tokyo Medical Center, Tokyo, Japan; ⁸Department of Hematology, Oncology, Allergy and Respiratory Medicine, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama, Japan; ⁹Department of Allergy, Tokyo Metropolitan Children's Medical Center, Tokyo, Japan

To cite this article: Konno S, Hizawa N, Fukutomi Y, Taniguchi M, Kawagishi Y, Okada C, Tanimoto Y, Takahashi K, Akasawa A, Akiyama K & Nishimura M. The prevalence of rhinitis and its association with smoking and obesity in a nationwide survey of Japanese adults. *Allergy* 2012; **67**: 653–660.

Keywords

asthma; rhinitis; smoking; BMI.

Correspondence

Satoshi Konno, First Department of Medicine, School of Medicine, Hokkaido University, Kita-15 Nishi-7 Kita-Ku, Sapporo 060-8638, Japan.
Tel.: +81 11 716 1161 (Ext. 5911)
Fax: +81 11 706 7899
E-mail: satkonno@med.hokudai.ac.jp

Accepted for publication 04 January 2012

DOI:10.1111/j.1398-9995.2012.02793.x

Edited by: Wytske Fokkens

Abstract

Background Rhinitis is a common disease, and its prevalence is increasing worldwide. Several studies have provided evidence of a strong association between asthma and rhinitis. Although smoking and obesity have been extensively analyzed as risk factors of asthma, associations with rhinitis are less clear.

Objective The aims of our study were (i) to evaluate the prevalence of rhinitis using the European Community Respiratory Health Survey (ECRHS) questionnaire in Japanese adults and (ii) to evaluate the associations of smoking and body mass index (BMI) with rhinitis.

Methods Following our study conducted in 2006–2007 to determine the prevalence of asthma using the ECRHS questionnaire, our present analysis evaluates the prevalence of rhinitis and its association with smoking and BMI in Japanese adults 20–79 years of age ($N = 22819$). We classified the subjects (20–44 or 45–79 years) into four groups as having (i) neither rhinitis nor asthma; (ii) rhinitis without asthma; (iii) asthma without rhinitis; or (iv) rhinitis with asthma. We then evaluated associations with smoking and BMI in each group.

Results The overall age-adjusted prevalence of rhinitis was 35.1% in men and 39.3% in women. A higher prevalence was observed in the younger population than in the older population. Active smoking and obesity were positively associated with asthma without rhinitis. In contrast, particularly in the 20- to 44-year age-group, active smoking and obesity were negatively associated with rhinitis without asthma.

Conclusion The results of the present study suggest that smoking and obesity may have different effects on the development of rhinitis and asthma.

Rhinitis, particularly allergic rhinitis, is one of the most common respiratory disorders. Although rhinitis is not a life-threatening condition, it has a huge socioeconomic impact, as it affects people at the ages normally associated with active employment or attending school. Accordingly, epidemiologic studies for evaluating the prevalence of rhinitis and associated factors are required.

Several epidemiologic studies of the general population have provided evidence of a strong association between asthma and rhinitis (1–3). Practice guidelines for asthma care reinforce the importance of identifying and treating rhinitis in patients with asthma (4,5). Although it was initially believed that a common atopic background accounts for the increased risk of patients with rhinitis developing asthma,

recent studies have demonstrated that rhinitis is also a risk factor for asthma in nonatopic patients (2). These results suggest that rhinitis and asthma could be manifestations of the same disease, irrespective of atopic status, and that they represent a continuum, sharing common pathologic and physiologic characteristics. This phenomenon has been labeled 'one airway one disease' or 'united airways disease'.

Conversely, there also exist major differences between the upper and lower airways (6,7). Important differences between pulmonary and nasal responses include the residence time of inflammatory cells, chemical mediators, and the mechanisms regulating repair of the epithelium following an inflammatory event. Bronchi are characterized by the presence of smooth muscle, which is responsible for bronchoconstriction. The remodeling of the airways is less extensive in the nose than in the bronchial wall.

Both genetic and environmental factors play important roles in the etiology of rhinitis and asthma. Among various environmental factors, smoking and obesity have been extensively analyzed as risk factors of asthma (8–13). There is accumulating evidence that exposure to environmental tobacco smoke is associated with the development of asthma in children (8,9). Several studies have also suggested that active smoking is associated with the development of asthma in adults (10, 11). However, the association of rhinitis with smoking and obesity is less clear. Of note, recent studies have shown an inverse association of rhinitis with smoking and obesity (3,14,15).

In the present analysis, following our study conducted in 2006–2007 for evaluation of the prevalence of asthma and its risk factors (16,17), we evaluated the prevalence of rhinitis using the European Community Respiratory Health Survey (ECRHS) questionnaire, which has been used in several studies for the nationwide analysis of the prevalence of rhinitis (18–22). In addition, we evaluated the association of smoking and body mass index (BMI) with rhinitis, considering the coexistence of rhinitis and asthma. This study was approved by the Ethics Committee of Sagami National Hospital and Hokkaido University.

Methods

Study design and questionnaire

A population-based, cross-sectional study was conducted with Japanese subjects 20–79 years of age, living in ten different areas of Japan. Detailed methods for selecting areas, participants, questionnaire distribution, and response rates in each area were described in our previous reports (16,17). We classified subjects as having rhinitis if they responded affirmatively to the question, 'Do you have any nasal allergies including hay fever?' We classified subjects as having a wheeze if they responded affirmatively to the question, 'Have you had wheezing or whistling in your chest at any time in the last 12 months?' This question is used worldwide for the evaluation of the prevalence of asthma for subjects aged 20–44 years (23–26). We also classified patients as having asthma if they met following two criteria (17,25): (i) an affirmative

response to the question, 'Have you ever had asthma?' followed by 'Was this confirmed by a doctor?' and (ii) having at least one asthma-related symptom in the last 12 months. A subject was considered to have asthma-related symptoms if he or she answered in the affirmative to at least one of the following four questions: (i) 'Have you had wheezing or whistling in your chest at any time in the last 12 months?', (ii) 'Have you woken up with a feeling of tightness in your chest at any time in the last 12 months?', (iii) 'Have you been woken up by an attack of shortness of breath at any time in the last 12 months?', and (iv) 'Have you been woken up by an attack of coughing at any time in the last 12 months?' We classified subjects according to their smoking habits as 'active smokers' if they were current smokers and had smoked at least one cigarette per day or one cigar a week for the past year, or 'past smokers' if they had smoked for at least 1 year (as defined above) but not during the last month. All other subjects were considered nonsmokers. Body mass index was categorized into four groups: <18.50, 18.50–24.99, 25.00–29.99, and ≥ 30.00 kg/m². This study was conducted from July to October 2006, except in Mitake Town, Gifu, where the study was conducted from January to February 2007.

Statistical analysis

A total of 22819 subjects who responded to all questions regarding gender, age, the presence of wheeze, asthma, and rhinitis, smoking habit, height, and body weight were analyzed. Statistical analyses were performed using the statistical software package SYSTAT for Windows, version 11 (SYSTAT, San Jose, CA, USA). Fisher's exact tests were carried out to assess the differences in prevalence between men and women. Univariate and multivariate logistic regression models were used to calculate adjusted odds ratios (OR) and 95% confidence intervals (CI). To assess the differences in prevalence between areas, the prevalence in each area was adjusted to a standard population with an equal distribution by age using age-groups 20–29, 30–39, 40–49, 50–59, 60–69, and 70–79 for men and women separately. Age-specific prevalence of rhinitis with 95% CI was also calculated to explore the effects of age. For all statistical analyses, a *P* value <0.05 was considered significant.

Results

Table 1 shows the age-standardized prevalence of rhinitis in ten areas, and Table 2 shows the prevalence of rhinitis by age and gender in all subjects. The overall age-adjusted prevalence of rhinitis was 35.1% (95%CI, 34.2–35.9) for men and 39.3% (38.4–40.2) for women. A gradual decrease in the prevalence of rhinitis in subjects >20 years of age in men and in subjects >50 years of age in women was observed (Table 2). The prevalence was lowest in Kamishihoro Town, Hokkaido, probably due to reduced levels of cedar pollen in Hokkaido (the north island of Japan), which is a major cause of pollinosis in Japan (Table 1). In the age-groups 30–39, 40–49, 50–59, and 60–69, the prevalence of rhinitis was significantly higher among women than among men (Table 2). To adjust for the effect of gender differences in smoking

Table 1 Age-standardized prevalence of rhinitis per area

Study area	Number of responders (<i>n</i>)	Prevalence of rhinitis (%)			
		Men (<i>N</i> = 11132)		Women (<i>N</i> = 11687)	
		No adjustment	Age-adjusted*	No adjustment	Age-adjusted *
Kamishihoro Town, Hokkaido	3016	17.7 (15.8–19.6)	18.8 (16.8–20.8)	23.1 (21.0–25.2)	24.0 (21.8–26.1)
Fuchu Town, Toyama	2814	30.0 (27.6–32.4)	29.1 (26.7–31.5)	29.0 (26.6–31.4)	28.7 (26.4–31.1)
Setagaya Ward, Tokyo	1774	48.9 (45.6–52.2)	47.3 (44.0–50.6)	49.3 (46.0–52.6)	48.3 (45.0–51.5)
Sagamihara City, Kanagawa	3523	43.3 (41.0–45.6)	44.3 (42.0–46.6)	50.3 (48.0–52.6)	50.4 (48.0–52.7)
Fujieda City, Shizuoka	2534	38.1 (40.8–45.4)	38.3 (35.6–41.0)	46.8 (44.1–49.5)	46.4 (43.7–49.1)
Mitake Town, Gifu	1490	40.7 (37.1–44.3)	40.0 (36.5–43.5)	43.7 (40.2–47.2)	41.5 (38.0–45.0)
Nagakute Town, Aichi	1232	41.7 (37.6–45.8)	41.3 (37.3–45.4)	47.4 (43.6–51.2)	44.9 (41.1–48.6)
Akiolta Town, Hiroshima	1959	31.2 (28.2–34.2)	32.6 (29.6–35.6)	34.0 (31.1–36.9)	40.2 (37.2–43.2)
Kurashiki Town, Okayama	2259	33.0 (30.2–35.8)	32.9 (30.1–35.7)	37.9 (35.1–40.7)	37.8 (35.0–40.6)
Nangoku City, Kochi	2218	31.2 (28.4–34.0)	31.0 (28.3–33.8)	34.0 (31.3–36.7)	34.7 (32.0–37.5)

Data are presented as percentage with 95% confidence interval in parentheses.

*Prevalence was adjusted to a standard population by age and gender, using the age-groups 20–29, 30–39, 40–49, 50–59, 60–69, and 70–79 years.

Table 2 Prevalence of rhinitis by gender and age

Age (years)	Prevalence of rhinitis (%)		<i>P</i> -value
	Men	Women	
All subjects (<i>N</i> = 22819)			
20–29	48.2 (45.7–50.7)	47.8 (45.2–50.4)	0.83
30–39	45.2 (42.9–47.4)	49.7 (47.5–51.9)	0.0050
40–49	40.9 (38.6–43.2)	50.0 (47.8–52.2)	<0.001
50–59	32.9 (31.0–34.9)	38.7 (36.8–40.6)	<0.001
60–69	25.2 (23.4–27.1)	29.6 (27.7–31.4)	0.0015
70–79	18.0 (16.1–19.9)	20.1 (18.2–22.0)	0.13
Nonsmokers (<i>N</i> = 13610)			
20–29	49.5 (45.9–53.1)	48.2 (45.2–51.2)	0.60
30–39	49.6 (45.6–53.6)	50.0 (47.5–52.6)	0.85
40–49	49.7 (45.4–54.0)	50.1 (47.6–52.6)	0.87
50–59	40.6 (36.8–44.3)	39.1 (37.0–41.1)	0.50
60–69	27.1 (23.9–30.3)	29.7 (27.7–31.7)	0.19
70–79	17.5 (14.5–20.5)	20.0 (18.0–22.0)	0.19

Data are presented as percentage with 95% confidence interval in parentheses.

prevalence on prevalence of rhinitis (16), the prevalence of rhinitis was calculated after limiting the subjects to nonsmokers (*N* = 13610). The prevalence of rhinitis among nonsmokers was not significantly different between genders in all age-groups (Table 2).

As rhinitis and asthma have been reported to coexist (1–3), associations between rhinitis and the presence of wheeze/asthma were analyzed in this population of survey respondents. Positive associations between rhinitis and wheeze/asthma were shown among all respondents 20–44 years of age (*P* < 0.001) and 45–79 years of age (*P* < 0.001) (Table 3). A similar association was also observed in nonsmokers (*P* < 0.001) (Table 3).

Because significant coexistence of rhinitis and wheeze/asthma was observed, we classified all subjects into four

Table 3 Association of rhinitis and the presence of wheeze or asthma*

	Rhinitis and wheeze		Rhinitis and asthma	
	OR	95%CI	OR	95%CI
20–44 years				
All subjects (<i>N</i> =8563)	2.29	1.96–2.67	2.90	2.38–3.55
Nonsmokers (<i>N</i> =4892)	2.74	2.16–3.47	3.14	2.34–4.20
45–79 years				
All subjects (<i>N</i> =14256)	2.05	1.83–2.29	3.36	3.04–4.37
Nonsmokers (<i>N</i> =8718)	2.50	2.14–2.92	4.43	3.48–5.62

The definition of 'wheeze' and 'asthma' is described in Methods.

*Odds ratios (OR) and 95% confidence intervals were calculated for the association of rhinitis with wheeze or asthma.

P < 0.001 for all analyses.

groups and evaluated the pure association of rhinitis with smoking and obesity: (i) none of the conditions [Rhinitis(–) Wheeze(–); *N* = 13267], [Rhinitis(–) Asthma(–); *N* = 14025]; (ii) rhinitis without wheeze/asthma [Rhinitis(+) Wheeze(–); *N* = 7263], [Rhinitis(+) Asthma(–); *N* = 7767]; (iii) wheeze/asthma without rhinitis [Rhinitis(–) Wheeze(+); *N* = 1126], [Rhinitis(–) Asthma(+); *N* = 368]; (iv) rhinitis with wheeze/asthma [Rhinitis(+) Wheeze(+); *N* = 1163], [Rhinitis(+) Asthma(+); *N* = 659]. Table 4 shows the characteristics of the subjects in each group.

Tables 5, and 6, Tables S1 and S2 show the results of the multivariate logistic regression analysis for the association of smoking status and BMI using the outcome variables 'rhinitis without wheeze/asthma', 'wheeze/asthma without rhinitis', and 'rhinitis and wheeze/asthma' in the 20–44-year (Table 5, Table S1) and 45–79-year (Table 6, Table S2) age-groups. Active smoking was positively associated with wheeze

Table 4 Characteristics of subjects in the eight groups

	Rhinitis (–) Wheeze (–)	Rhinitis (+) Wheeze (–)	Rhinitis (–) Wheeze (+)	Rhinitis (+) Wheeze (+)	Rhinitis (–) Asthma (–)	Rhinitis (+) Asthma (–)	Rhinitis (–) Asthma (+)	Rhinitis (+) Asthma (+)
Number	13267	7263	1126	1163	14026	7767	368	659
Age (years) (median, range)	55 (20–79)	45 (20–79)	59 (20–79)	47 (20–79)	56 (20–79)	46 (20–79)	53 (20–79)	43 (20–79)
Men/women	6584/6683	3312/3951	682/444	554/609	7075/6951	3582/4185	191/177	284/375
Smoking status (n)								
Nonsmokers	7896	4614	473	627	8194	4854	176	387
Past smokers	1797	1061	219	198	1939	1142	77	117
Current smokers	3574	1588	433	338	3893	1771	115	155
BMI (kg/m ²)(n)								
<18.50	1045	622	95	91	1108	649	33	64
18.50–24.99	9420	5371	708	746	9892	5598	236	419
25.00–29.99	2469	1113	269	270	2659	1247	79	136
≥30.00	333	157	54	56	367	173	20	40

BMI, body mass index.

The definition of 'wheeze' and 'asthma' is described in Methods.

Table 5 Association of smoking status or BMI with the presence of rhinitis and/or asthma (20–44 years)

	Rhinitis (+) Wheeze(–)		Rhinitis (–) Wheeze(+)		Rhinitis (+) Wheeze(+)		Rhinitis (+) Asthma(–)		Rhinitis (–) Asthma(+)		Rhinitis (+) Asthma(+)	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
All subjects (N = 8563)												
Sex												
Male	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
Female	1.00	0.90–1.11	1.07	0.80–1.43	1.36**	1.09–1.68	1.01	0.91–1.12	1.30	0.88–1.93	1.57**	1.21–2.04
Smoking status												
Nonsmokers	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
Past smokers	1.24*	1.05–1.47	2.02**	1.30–3.16	1.92***	1.42–2.60	1.22*	1.04–1.44	1.78	1.00–3.19	2.02***	1.42–2.86
Current smokers	0.78***	0.69–0.87	2.36***	1.75–3.18	1.41*	1.12–1.77	0.78***	0.70–0.87	1.78**	1.19–2.67	1.24	0.94–1.64
BMI												
<18.50	0.92	0.80–1.07	0.92	0.60–1.42	0.72	0.52–1.01	0.90	0.78–1.04	0.74	0.40–1.38	0.81	0.55–1.18
18.50–24.99	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
25.00–29.99	0.80**	0.69–0.93	1.07	0.74–1.56	1.38*	1.06–1.81	0.83*	0.72–0.96	1.05	0.63–1.76	1.31	0.94–1.82
≥30.00	0.77	0.58–1.02	2.40***	1.43–4.02	1.85**	1.20–2.87	0.74*	0.56–0.97	2.01	0.98–4.10	2.40***	1.50–3.83
Nonsmokers (N = 4892)												
Sex												
Male	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
Female	0.92	0.80–1.06	0.72	0.46–1.12	1.06	0.78–1.43	0.92	0.80–1.05	0.88	0.50–1.57	1.44	1.00–2.09
BMI												
<18.50	0.86	0.71–1.03	1.25	0.70–2.26	0.53*	0.33–0.86	0.83*	0.70–1.00	0.73	0.30–1.75	0.53*	0.30–0.93
18.50–24.99	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
25.00–29.99	0.77*	0.63–0.95	1.47	0.82–2.63	1.31	0.88–1.94	0.79*	0.65–0.97	1.46	0.70–3.03	1.21	0.75–1.96
≥30.00	0.56**	0.38–0.83	1.93	0.80–4.68	1.66	0.89–3.10	0.58**	0.39–0.85	1.94	0.66–5.70	1.93	0.95–3.91

BMI, body mass index.

OR and 95% CI for rhinitis, wheeze(asthma), and comorbidity using none of the conditions as reference group.

Data are adjusted by age, sex, smoking status, BMI, pet ownership, and center.

* $P < 0.05$.

** $P < 0.01$.

*** $P < 0.001$.

without rhinitis in both age-groups (20–44 years: OR = 2.36, $P < 0.001$; 45–79 years: OR = 2.12, $P < 0.001$). In contrast, being an active smoker was negatively associated with rhinitis

without wheeze (20–44 years: OR = 0.78, $P < 0.001$; 45–79 years: OR = 0.57, $P < 0.001$). Being overweight (BMI, 25.00–29.99) or obese (BMI ≥ 30.00) was positively associated with

Table 6 Association of smoking status or BMI with the presence of rhinitis and/or asthma (45–79 years)

	Rhinitis (+) Wheeze(-)		Rhinitis (-) Wheeze(+)		Rhinitis (+) Wheeze(+)		Rhinitis (+) Asthma(-)		Rhinitis (-) Asthma(+)		Rhinitis (+) Asthma(+)	
	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI	OR	95%CI
All subjects (N = 14256)												
Sex												
Male	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
Female	1.14*	1.03–1.27	0.90	0.75–1.09	1.33**	1.08–1.65	1.17**	1.05–1.28	1.23	0.87–1.74	1.44*	1.07–1.94
Smoking status												
Nonsmokers	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
Past smokers	1.14*	1.01–1.30	1.80***	1.44–2.25	1.53**	1.19–1.98	1.15*	1.02–1.30	2.30***	1.55–3.40	1.42	1.00–2.02
Current smokers	0.57***	0.50–0.64	2.12***	1.73–2.61	1.12	0.88–1.43	0.60***	0.53–0.67	1.38	0.92–2.06	0.54**	0.36–0.81
BMI												
<18.50	0.82*	0.69–1.00	1.50**	1.13–1.99	1.23	0.88–1.72	0.80*	0.67–0.95	1.70*	1.05–2.76	1.75**	1.16–2.63
18.50–24.99	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
25.00–29.99	0.97	0.87–1.07	1.53***	1.29–1.83	1.54***	1.26–1.87	0.98	0.89–1.09	1.44*	1.04–1.99	1.38*	1.04–1.84
≥30.00	0.99	0.74–1.35	2.32***	1.54–3.58	2.46***	1.58–3.81	1.02	0.77–1.35	2.31*	1.15–4.64	2.55***	1.42–4.60
Nonsmokers (N = 8718)												
Sex												
Male	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
Female	1.00	0.89–1.13	0.69**	0.55–0.88	1.25	0.95–1.64	1.04	0.92–1.17	1.11	0.70–1.75	1.28	0.89–1.83
BMI												
<18.50	0.91	0.73–1.13	1.72*	1.14–2.60	1.29	0.83–2.00	0.89	0.72–1.10	1.40	0.66–2.96	1.50	0.89–2.55
18.50–24.99	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference	1	Reference
25.00–29.99	0.89	0.78–1.03	1.67***	1.29–2.16	1.48**	1.14–1.93	0.91	0.80–1.04	1.77*	1.14–2.75	1.34	0.94–1.91
≥30.00	0.88	0.59–1.30	3.01***	1.78–5.09	2.73***	1.60–4.68	0.89	0.62–1.28	1.98	0.71–5.56	2.65***	1.34–5.22

BMI, body mass index.

OR and 95% CI for rhinitis, wheeze(asthma), and comorbidity using none of the conditions as reference group.

Data are adjusted by age, sex, smoking status, BMI, pet ownership, and center.

* $P < 0.05$.

** $P < 0.01$.

*** $P < 0.001$.

wheeze without rhinitis (obesity: OR = 2.40, $P < 0.001$), but negatively associated with rhinitis without wheeze (overweight: OR = 0.80, $P = 0.0028$) in the 20–44-year age-group. When the same analysis was performed after limiting subjects to lifetime nonsmokers, a similar association of high BMI and rhinitis without wheeze (overweight: OR = 0.77, $P = 0.015$; obesity: OR = 0.56, $P = 0.0043$) was observed. When asthma was used instead of wheeze, similar results were obtained regarding the positive association between smoking and asthma without rhinitis, and the negative association between obesity and rhinitis without asthma in subjects 20–44 years of age (Table 5, Table S1).

Discussion

Consistent with the results from a number of earlier studies (1–3), a strong association between rhinitis and the presence of wheeze/asthma was observed in this study, supporting the hypothesis that rhinitis and asthma represent a continuum of the same disease. Of note, significant association between two conditions was observed even in elderly subjects (45–79 years). Although it was initially believed that a common

atopic background accounts for the increased risk of asthma development in patients with rhinitis, recent studies have demonstrated that rhinitis is also a risk factor for asthma in nonatopic patients (2). Moreover, recent studies report a higher prevalence of sinonasal symptoms even in chronic obstructive pulmonary disease (COPD) (27–29). Collectively, the co-occurrence of rhinitis and the presence of wheeze/asthma observed both in younger (20–44 years) and older (45–79 years) adults in this study could be explained not only by the underlying common allergic components of rhinitis and asthma, but also by the common pathogenesis of upper and lower airway inflammation unrelated to atopy and allergy.

Although this study revealed the coexistence of rhinitis and wheeze/asthma, their association with the potential risk factors of active smoking and obesity opposed one another. In contrast to the results from several studies showing positive association between smoking and asthma (10, 11), the present study demonstrates that active smoking has a negative correlation with rhinitis. Consistent with our results, the protective effect of smoking on the development of cedar allergy has been reported in the Japanese population (14). Tobacco smoke has been shown to suppress human

immunity, including inhibition of cytokine production and T-cell responsiveness (30,31). Accordingly, the immunosuppressive effect of smoking might result in the low prevalence of rhinitis in active smokers.

Several *in vivo* studies have shown that short-term smoking or administration of nicotine attenuated allergic airway inflammation in mice (32,33), whereas smoking enhanced airway hyperresponsiveness in other reports (34,35). Botelho et al. have recently shown that smoking attenuated eosinophilic airway inflammation, while enhancing airway remodeling in a house dust mite (HDM)-induced asthma model in mice (35). Taken together, factors other than allergic responses, such as the induction of airway hyperreactivity or remodeling, which could directly influence the airways, might account for the effect of smoking on asthma.

In the present study, the presence of rhinitis was higher among women than in men in all subjects. However, when subjects were limited to lifetime nonsmokers, no significant difference was observed between genders (Table 2), suggesting that the higher prevalence of rhinitis among women in all subjects was influenced by the lower smoking rate among women. Therefore, when the prevalence of rhinitis is evaluated in epidemiologic surveys, smoking status needs to be considered.

Another interesting and unexpected finding of this study is that obesity had a negative association with rhinitis in subjects 20–44 years of age. Although the association between obesity and asthma has been gaining more attention, few studies have been conducted concerning the relationship between obesity and other allergic diseases. Of note, a recent large survey of school children in Japan showed that the obesity was negatively associated with the prevalence of rhinitis (15), which is consistent with our results. A recent report by Johnston et al. (36) showed enhanced airway responsiveness with attenuation of airway inflammation in obese mice. These results may support our findings of opposing effects of obesity on asthma and rhinitis, similar to the opposite effects of smoking on both disease conditions.

Several previous reports have shown results contradicting those in our study regarding the association between smoking status/obesity and rhinitis (37–39). The exact reasons for this inconsistency are unclear; however, unlike the current study, most previous studies did not consider the coexistence of rhinitis and asthma. One previous study that did consider the coexistence of rhinitis and asthma was conducted in Italy using the ECRHS questionnaire and, similar to our study, found a negative association between active smoking and rhinitis (3). Thus, consideration of the co-occurrence of asthma and rhinitis might have contributed to revealing the interesting negative association between rhinitis and active smoking/obesity in the current study.

A number of limitations to this study exist, as previously described (16, 17). The cross-sectional nature of the study precludes establishing temporal relationships or inferring causality. Thus, the possibility that subjects with rhinitis might be less likely to smoke or tend not to exercise resulting in obesity could be another explanation for the negative

association between rhinitis and active smoking/obesity. The number of risk factors was limited, and we did not consider the possible contributions of other relevant variables, such as economic status, occupation, and passive smoking. Questions regarding the presence of nasal allergies in the ECRHS questionnaire are ambiguous, as some patients with nonallergic rhinitis might respond affirmatively, and this question cannot distinguish between seasonal and perennial rhinitis. In addition, subjects who previously had, but do not currently have, rhinitis symptoms might also have been included in the rhinitis group. Furthermore, as the reliability of the ECRHS questionnaire with subjects >45 years of age has not been widely evaluated, the associations between rhinitis and active smoking/obesity among older subjects in this study need to be cautiously interpreted. To confirm our results, further studies are needed using a prospective design with precise definitions of asthma and rhinitis, particularly for older subjects, and more confounding factors need to be considered for their possible associations with asthma and rhinitis.

We wish to emphasize that our results are not meant to change policies regarding smoking and weight management. Because of the numerous possible adverse effects, smoking and obesity should not be considered therapeutic options. Our findings could provide clues to understanding the pathogenesis of rhinitis and for therapeutic strategies for protection against rhinitis. The results of this study also encourage a more intensive investigation into the relationship between smoking and rhinitis.

In conclusion, this cross-sectional study using the ECRHS questionnaire determined the prevalence of rhinitis in Japanese population. The results of the present study suggest that smoking and obesity may have different effects on the development of rhinitis and asthma.

Acknowledgments

This work was supported by Health and Labor Science Research Grants from the Ministry of Health, Labor, and Welfare, Japan.

Author contributions

Masami Taniguchi, Kiyoshi Takahashi, Akira Akasawa, Kazuo Akiyama, and Masaharu Nishimura involved in the design of the protocol. Satoshi Konno and Nobuyuki Hizawa involved in the analysis and writing. The other authors participated in the design of the protocol and drafting of the paper.

Conflicts of interests

The authors declare no conflicts of interest.

Supporting Information

Additional Supporting Information may be found in the online version of this article: